

Childhood Education

Journal of the Association for
Childhood Education International

一九六四年十月号は、「身体的適応力を増すのにどうしたらよいか」という特集である。最初の論文では、オハイオ大学小児科のトマス・シャファーが「身体的適応力とは何か」を問うている。それは体力テストでよい点をとる以上のものである。それは、よい健康の上につくられる。故に、できる限りの予防接種を行ない、難聴のものには補聴器をか

する能力である。このような能力は、かつては、自然の生活の中で保証されていたものであつたが、現代の文化生活の中では、交通も便利になり、自動的な機械も増して、とくに計画的に機会をつくるなければ、自然生活を回復できなくなってしまった。ここに、健康教育の問題がある。

さらに、私どもは、「全適応力」を忘れてはならない。人は、筋肉の強健のみならず、情緒的知的、社会的な健康を必要とする。運動能力があまり強調されすぎると、個人差を忘れてしまう危険がある。たとえ、身体的にハンディキャップをもつたものでも、それなりの運動教育のプログラムがあるのである。

身体的適応力に関する教育計画の主要な目標は、すべての人々に、その健康と、活力と、耐久力を、最大限に發揮させるような機会を与え、このような意欲を起こさせることである。

遊びの中で、子どもは、健康に必要な活動をしている。子どもは、それで、自発的に、自分自身のやり方でしている。子どもは、自ら時間を調節し、動きの強さを加減していく。そしてそれは、第三者が、外的な規律によつてきめることは不可能なことなのであ

十 月 号

けるなどの健康管理がまず重要である。次いで、私どもは、個人の力、耐久力、生理的な諸能力に応じて、「力動的な適応力」をつけなければならない。すなわち、遊び、仕事をする能力、何か危険が生じたときにそれに対処する能力である。こののような能力は、かつては、自然の生活の中で保証されていたものであつたが、現代の文化生活の中では、交通も便利になり、自動的な機械も増して、とくに計画的に機会をつくるなければ、自然生活を回復できなくなってしまった。ここに、健康教育の問題がある。

遊びは、それ自らがたのしみであるような自発的な活動の中で、いろいろの能力を使用する機会を子どもたちに与えている。現代の都市生活には、空間の制約があり、時間の制限があり、自由の制限があつて、子どもたちから、正常な発達に必要な遊びでの機会が奪われている。現在、よく見られる、あまりに組織立った遊びや、運動訓練のプログラムでは、遊びの必要性を否定はしないまでも、遊びの重要性を過少評価しているようみえる。幼児は、自分自ら必要なものを選択し、自分自身で補償作用をもつた生活体なのである。

る。

子どもが小学校にゆくようになって、次第に束縛が多くなると、このような身体活動の機会が次第に少くなる。近年はとくに、身体的適応力をつけるために、体育的訓練が遊びに代りつつある傾向が認められる。学校では、教科が強調され、子どもたちは、静かに坐って、よみ書きをし、お互いに話を交すことも禁止されることが多い。しばしば、子どもたちは、現実の世界の直接の興味をすることを要求され、身体的活動の要求も満たされない。

休み時間と、体育訓練の時間があれば、子どもは放課後に遊べるのだから、それで、身体的活動の欲求は満たされるではないかといふ議論もある。しかし、よく調べると、休み時間と、放課後の遊びだけでは、多くの都市の子どもにとっては、緊張を解消するのに十分ではないのである。都市生活の緊張を解消し、知的欲求をみたすためにも、自発的な遊びは、幼稚・児童にとって、なくてはならないものである。

身体的適応力をつけるために、組織立ったプログラムをもつことを主唱する人びとは、

一週に、わずか一時間か二時間の集中的訓練によって、それが可能であると思っているのであろうか。一週のその他の時間で何をしているかということは、身体的適応力と関係があるのではないか。児童の全人的発達を認識するならば、すべての教科について、教育者はもう一度よく反省してみる必要がある。

まず第一に、子どもは、乳児から大人にいたるまで、順序を追つて発達するものであつて、それぞれの段階に応じて、教育の内容と方法が考えられなければならない。

第二に、子どもは、いろいろの能力や態度や可能性をもちながら、ひとつの統合された生活体——ハーネソナリティであり、いろいろの教科に均等に分割される存在ではない。

遊びは、自発的、自律的な学習をふくみ、現実の世界の積極的な探索を可能にするものであつて、子どもの健全な発達に必要欠くべからざるものである。子どもは、成長につれ心をもつて自分の目的に役立つものを、この中からみいだして下さることを望む」と巻頭においてテーマのないことを説明している。その内容をみると、「初等教育の社会科について……特に五年生の社会科の教育法・マステディアと三年生の社会科」「時事問題と教育……移住民の子どもたちと学校教育について・キューバからの亡命者によりひきおこさ

と、同情心をもつて、幼い子どもを愛するならば、遊びを尊重せねばならない。個人の価値を信じ、子どもの人格を尊重するならば、遊びをたいせつにせねばならない。

さらに、この号では、教師が、自分自身を見るなどの重要性についての論説があり、また、小学校におけるワークブックの流行は、教師を怠惰にし、教育への情熱を失わせるところになると述べている論説、「沈黙の教師——ワークブック」というのがある。(T)

十一月号

十一月号で、マーガレット・ラスミュッセンは「この巻には特集のテーマがない。私は、読者の一人ひとりがいろいろのことに関心をもつて自分の目的に役立つものを、この中からみいだして下さることを望む」と巻頭においてテーマのないことを説明している。その内容をみると、「初等教育の社会科について……特に五年生の社会科の教育法・マステディアと三年生の社会科」「時事問題と教育……移住民の子どもたちと学校教育について・キューバからの亡命者によりひきおこさ

れる教育や社会の問題」「美術教育について」などである。この中から、一、二、の内容を紹介してみる。

サン・ディエゴ州立大学の教授であり、またカリフォルニアのアートセンターにある子どものアトリエの同人でもあるゲラルド・ゲイテは、初等教育における美術について次のように述べている。

「美術は、どこに住んでいようと、また文化がどのようなものであろうと、すべての人が共通の経験である。美術の経験は、すべての子どもにとって基礎的なごく自然の活動である。美術には練習などの必要がない。子どもたち自身のベースで、また子どもたちの自由な方法で、したいと思っていることをためすことができるという確信を子どもに感じさせることができる。自分に対する態度、自己表現の態度は、美術を通して生まれてくるのである。美術は共通の経験であるために、詩的感興、創作力、そしてさらに楽しみの源となる……（それらすべては、子どもにとつて大きな意義を持つのだが）

また彼は、美術—それは、ひとつの経験であると題して「子どもの美術表現は、アイデー

アイ・思考・態度を伝達している。それは幼い子どもによつても読まれ理解されうることの目に見える言葉である。それゆえ、子どもたちは、美術によって共通の経験をするのである。彼らは物についてのアイディア・感情などを表現するために、色を塗つたり、描いたり、かたちを作つたりする。彼らは活動への推進力を有している。そして美術的経験は、彼らに社会的関係、交友、染しみ、思考などの健全なる機会を与える。美術は、子どもの想像性に刺激を与え、思考にまでみちびくのである」と述べ、さらに「子どもたちの家庭生活、宿題、個人の興味、レクリエーション、休養などは、美術による経験を通して、いつそう完成されるのである」と付け加えている。

次いで美術の目的は、「専門の画家にすることではない」と強調し、また「美術は、子どもの創造能力、あるいは衝動を満足させることがある。すなわち彼らの日々の生活を豊かにし、美に対する内面的感覚を高めることである。そして美術は創造的なものであり、テストや基準により標準化されるものでない」と述べている。

「私は、忍耐に賛成する。そして偏見には反対である。忍耐とは、違った意見を、容易に受容したり、あるいは、他人にゆづることを意味しているのではない。家庭環境は、自然に子どもの態度に影響している。そして、幼

達するために役立つのである。このため、個的、社会的適応の手段として、幼稚園・小学校における美術教育計画をもっと推進すべきである」と、その教育効果の多大であることを述べている。

幼稚園や小学校は家庭で育てられた考え方を破つたり、あるいは、補強したりする力をもつてゐる。学校経験は、普通の子どもにとって、人間生活における統合的、組織的、安定的な経験の一つである。もし学校が人間生活におけるひとつの経験であるならば、偏見についての卒直な議論が禁じられたり、避けられたりすべきではない」ということである。

偏見は、世代を通して永続し、父から息子に受け継がれる。ここでは、教師はいかにしてわれの社会にあるこのような要素とたかつたらよいのか、という問題が投げかけられている。

価値ある教育は矛盾がないことと耐久力を必要とする。忍耐についての考え方と信念は、言葉や行動における矛盾を防止するために、はつきり心にとめておかれるべきである。偏見を完全に撲滅することは不可能であるが、それにもかかわらず問題や争いで満ちた世の中で子どもたちが協調して暮らしていくようになることは、教師の責任である。困難な課題ではあるが、教師は、偏見を忍耐と取りかえるための努力をくりかえして続けねばならない。

ロレンス・F・フランクは、偏見とたたかうことを必要とする気持ちを次のように述べている。

「……我われは、どのような人でも、不必要なに圧迫されたり権利を奪われたり、強制されたり、不当に扱われたり、無視されたり、屈辱を与えられたりすることを認めることはできない。というのは、非常に多くの実際の証拠から、虐待されたり、権利を奪われたり、無視されたりする人びとは、自由社会の擁護と共にすることができないということを知っているから」

この他の論説でも、直面している教育の問題がいくつかとり上げられている。

幼児の段階から「偏見」を与えないようにする教育が考えられなければならない。(F)

* * *

十二月号は「感受性」と題する特集である。巻頭の論文で、ニューヨーク大学の人類学の教授、アルペンフェルス博士は、子どもは、自分の感情に直面して、それを表出することを許されねばならないことを強調する。そして、おとの社会的 requirement に順応することは、子どもの感受性をそこなうものであることを述べる。

あるきこりが、ある日、ニューヨークの五番街の雑踏を歩いていた時、突然、いっしょに歩いていた友人をひきとめていった。「このおろぎの鳴き声がきこえる」友人は「この交通の雜音の中では、こおろぎの声がきこえるはずはないじゃないか」と答えた。そのとき、彼のポケットから、十セント貨幣がころがりおちた。貨幣が歩道に落ちて音をたてた瞬間に、あたりの人は一齊にふりむいて、自分のお金ではないかをたしかめた。私どもの耳は、お金の音をきくのに慣れているけれども、このおろぎの声にはなれていないのである。

技術文明の時代において、感覚的感覚的敏さを育てることはむつかしい。周囲のとなりや、教師が、つとめて、子どものうちにあらゆる感受性の芽をのばすようにしなければ、それは育たない。子どもの周囲にはおとのの考え方によるしてよいことと、悪いこととにみちている。しかし、おとのの価値に従うだけでは、子どもの内的、創造的要求は満足しない。それでは、このように、おとのの要求と

子どもの要求との間にはきまれて、教師はどういうにすればよいのだろうか、第一に教師は、クラスの中での社会的経験を徐々に拡張し、子どもが自分の感情を表出すする時間を与えることが必要である。

第二に、子どもを混乱させ、困惑させるものは、おとなとの世界の矛盾であり、おとなが与える不安や恐怖であることを知り、クラスの生活の中で、子どもたち自身が、秩序を発見してゆくことを助けなければならない。

幼児教育学の教授、アグネス・ハート・フィールドは、教師の重要性について、次のように述べる。

現代は、人生に意義と満足を見出している者の少い時代である。このような時代にこそ、われわれは、創造的に、建設的に、情熱をもって生きる教師を必要としている。次の世代に道をなす教師は、自分自ら、道を見出していかなければならない。

子どもは、朝、幼稚園、学校にくるとき、さまざまな思いを抱き、またいろいろのものを携えてくる。ある子どもは、亀をもつてきて、床を歩かせ、集ってきた数人の子どもは、それをみてたのしんでいる。ある子どもは

「ぼくは先生が大好きだ。だって、先生の顔がわかるんだもの」といった。先生が、おはなしをするとき、子どもたちは、先生の顔から喜びや、悲しみや、何に関心をもっているかを理解することができるとき、子どもは、先生を理解しているのである。「先生、ぼくのセーターの袖をまくりあげてちょうだい。ぼく、指がしゃぶれないから」とある子どもが訴えてくる、先生は、その子の袖をまくり上げてやるのである。友だちと遊び疲れた子どもが、ためいきをついて先生のところにやってくる。「ぼく、抱っこしてほしくなっちゃった」先生は、いつも、そのような子どもを抱き上げてやる用意がなければならない。子どもは、そこに気持ちのやすらぎを感じるのである。

「あたし、今日も、良い気持ちをもつてきたのよ」といつて、女の子が、好きな麦わらぼうしをもつて、にこにこして幼稚園にきた。好きなものを、家からもつてきて、もつてかえるとき、彼女は、しあわせな感情を家から幼稚園にまでもつてくるのである。

教師は子どもの感情に、敏感でなければならぬ。

幼児の教育 第六十四卷 第八号

八月号 ◎ 定価六〇円

昭和四十年七月二十五日 印刷
昭和四十年八月 一日 発行

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼
発行者 津 守 真

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五
印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。